

事例報告 (サンプル4)

記入年月日 : 2021年9月25日

氏名	■■■■■	所属	■■■■■
事例発生時期	2019年4月16日	事例終了時期	2020年9月15日
表題	患者の希望により、自宅でドブタミンの持続静注を実施し、在宅看取りが実現できた症例		

記載上の注意 : MS明朝 10.5ptの黒文字を用いて記載し、以下の6つの項目を含め1枚に収めること。

1. 患者背景(介入に至るまでの経緯)

群馬県から依頼された在宅医療セミナーで携帯型精密輸液ポンプを使用した症例を紹介したところ、県内の病院薬剤師より、院内でドブタミン持続静注を半年以上継続して実施している患者について、自宅でのドブタミン持続静注の実現の可能性について検討したいと連絡があった。患者の自宅に帰りたいという希望に応じて院内にて集まった検討チームと共に携帯型精密輸液ポンプを使用した在宅でのドブタミン持続静注の濃度や投与サイクルなどを検討し、担当医の了解を得て退院、在宅療養となった。

2. 介入が必要と考えられた問題点

ドブタミン持続静注はほとんどが病院内で実施され、在宅療養での継続は困難と考えられているが、患者は大腸癌を合併しており、残された人生を自宅で孫達に囲まれて暮らしたいと強く希望していた。ドブタミン持続静注は保険診療上でも在宅医療では評価されておらず、薬剤の調整、管理、評価など、薬剤師を含むチームで対応する必要があった。

3. 介入の具体的な内容

自宅でのドブタミン持続静注の実現において、医師、訪問看護師に安定して継続使用できるドブタミンの濃度、流量、訪問サイクルなどを医師に提案した。使用するルートや医療材料も薬局で準備し、携帯型精密輸液ポンプの使用法、使用後のトラブルについても訪問看護師の相談に応じた。ドブタミン持続静注は保険診療上でも在宅医療では評価されておらず、ドブタミンは医師の使用する医薬品として薬局で預かって希釈し、訪問は1週間に1回として計画した。バイタルサインによってドブタミン持続静注が適正に実施されているかをチェックした。また、薬局の管理栄養士も同行し、厳格な塩分管理である1日6gが継続できるように支援した。再入院の可能性も高く、情報共有のSNSの使用について、病院医師をはじめとする院内のチームも参加してもらい、適宜アドバイスしていただけるように提案し、グループを作成した。

4. 介入の結果および考察

介入から8か月余り、急性増悪なく、患者の希望通り夫や息子夫妻との生活を楽しめ、孫の運動会にも参加できた。2019年年末のペースメーカーの入れ替えの際にできてしまった血腫を伴う感染症によって心不全が増悪し、解熱したタイミングで本人の強い希望で退院となったが、その後は徐々に終末期となり、心不全の緩和ケアを自宅にて実施して在宅で看取りとなった。在宅療養困難だと思われるドブタミンの持続静注だが、病院内のチームと在宅医療チームが協力して患者の在宅療養を可能にできた症例だと考える。

5. 今後の課題

ドブタミンの持続静注は、在宅医の診療報酬上で評価されておらず、ドブタミンは医師の訪問診療で薬剤のみ算定したが、薬局の混注の加算も算定できなかった。必要な物品類は患者の強い希望から全て患者の息子が負担することで実現した症例だが、薬局が関わることで医師の負担も軽減しながら在宅でのドブタミン持続静注が可能であることが示唆され、今後、診療報酬上も評価されることを期待する。

表題は事例を端的に表す

事例の理解を促す背景を記載する

事例の問題点を明確に示す

介入経過を時間経過で示す

介入の結果とその後の経過を評価・考察する

事例を振り返ってからの課題を検証する

患者情報

(事例報告4)

年齢	70歳代	性別	女性	介護認定	要介護1
居住形態	夫と二人暮らし。同敷地内に息子家族が居住	介入開始日	2019年4月16日	介入終了日	2020年9月15日
疾病名	カテコールアミン依存性心不全、大腸癌				
所見	(介入時) Alb 4.1g/dl, Cre 2.01 mg/dl, eGFR 19, Na 137mEq/l, K 4.5mEq/l, Hb 10.8g/dl, PT-INR 2.59, BNP 255pg/ml				
医療系サービス	<input checked="" type="checkbox"/> 訪問診療 <input checked="" type="checkbox"/> 訪問看護 <input type="checkbox"/> 看護職員訪問による相談・支援 <input type="checkbox"/> 訪問歯科診療 <input type="checkbox"/> 訪問薬剤管理指導 <input type="checkbox"/> 訪問リハビリテーション <input type="checkbox"/> 短期入所療養介護 <input type="checkbox"/> 訪問歯科衛生指導 <input type="checkbox"/> 訪問栄養食事指導 <input type="checkbox"/> 通所リハビリ <input checked="" type="checkbox"/> その他(病院からの理学療法士の訪問)				
介護系サービス	<input type="checkbox"/> 訪問介護 <input type="checkbox"/> 通所介護 <input type="checkbox"/> 短期生活介護 <input type="checkbox"/> 施設入所() <input type="checkbox"/> レンタル利用() <input type="checkbox"/> その他()				
特別な医療	処置内容 : <input checked="" type="checkbox"/> 点滴の管理 <input type="checkbox"/> 中心動脈栄養 <input type="checkbox"/> 透析 <input type="checkbox"/> ストーマの処置 <input type="checkbox"/> 酸素療法 <input type="checkbox"/> 気管切開の処置 <input type="checkbox"/> 疼痛の管理 <input type="checkbox"/> 経管栄養 <input checked="" type="checkbox"/> CPAP装置(夜間、随時のみ) 特別な対応 : <input type="checkbox"/> モニター測定(血圧、心拍、酸素飽和度 等) 褥瘡の処置 : <input type="checkbox"/> 失禁への対応 <input type="checkbox"/> カテーテル(コンドームカテーテル、留置カテーテル 等)				
生活状況	ドブタミン持続点滴さえ使用できれば、自由に歩き、料理を作ったりすることが可能。退院後も定期的な理学療法士の訪問により心臓リハビリを継続。歩数や体重、食事内容も自分で毎日記載し、積極的に治療に関わっている。				
精神状況	明るく前向きな性格で、周囲の協力によって在宅療養ができていることに感謝し「自分の経験を今後の医療に活かして欲しい」「やり残したことはない」と言っていたが、夜間はプロチゾラムが手放せず不安は常にあったと思われる。				

血液検査値など事例解釈に必要な情報を記載する

生活や精神の状況の記載は事例の状態把握を促す

処方変更状況を工夫して、わかりやすく示す

事例に関連する医療衛生材料等を記載する

共同指導内容があれば記載する

特記事項があれば記載する

処方薬・サプリメント等の内容(薬品名、用法等)

介入前		介入後	
処方薬・サプリメント名	用法	処方薬・サプリメント名	用法
アゾセמיד錠 30mg 1錠 フェブリク®20mg 1錠 ネキシウムカプセル®20mg 1カプセル アミオダロン塩酸塩錠 100mg 1錠 フォシーガ®5mg 1錠 スピロノラクトン 25mg 0.5錠 サムスカ®15mg 1錠 ワーファリン®1mg 1.75錠 フェルムカプセル®100mg 1カプセル プロチゾラム 0D0.25mg 2錠 ビモベンタン錠 2.5mg 2錠 デノパミン錠 10mg 3錠 ミヤBM®錠 3錠 ドブタミン注射 0.1%に調整	朝食後 夕食後 就寝前 朝夕食後 毎食後 9ml/日 持続静注	内服薬は左記同様に経過に応じてアゾセמיד、ワーファリン®は適宜増量や減量 ドブトレックスキット点滴静注®600mg	3ml/日 持続静注 ※終末期はモルヒネ持続皮下注射併用

医療衛生材料等の対応(名称・規格等)

ニプロ携帯型精密輸液ポンプ CAP-10, 専用ルート、ヘキサザックアルコール (CVポート消毒用)、エクステンションチューブ、アルコール綿など

他の職種との共同指導等の内容

- ・退院前カンファレンス・・・ドブタミン濃度の確認、塩分管理、訪問サイクル、医療材料の手配など
- ・自宅にて、病院からの理学療法士、訪問看護師、訪問薬剤師、訪問管理栄養士との共同指導
 ・・・・自宅での心臓リハビリ(歩数、心拍数などの確認)

その他、特記すべき事項

病院内チーム(医師、看護師、理学療法士、ソーシャルワーカー)と在宅医療チーム(医師、訪問看護師、薬剤師、管理栄養士、ケアマネジャー)と、情報共有のSNS使用